



夏休みが終わりに近づくも、炒られ焼かれる灼熱の日々。ふと思いついたのは、二学期の授業は古文や漢文をやれとのこと。

ほお、それでは少し漢文読んでおかなきゃいかん。テキスト覗くわけではないけれど、勘を取り戻すというか調子を回復しておくというか。炎暑から逃れるには冷たいビールだけではあるまい。漢籍に喰らいついて脂汗流し心頭滅却するもこれ一興か。

同僚諸氏はいざ知らず、こちら漢文をいたく愛好せるもほんの一ト月他事に気をとられると、その学力低下は無残をきわめ、その前にはさしたる苦勞なしに読めた(はずの)書物が晦渋のきわみ唸り声あげるといふ情けなさ。それでも何日か書物を睨みつけ返り点打ち声に出して訓み下す。カミさんからは「まだやってる」と冷たき一言あれど、摩訶不

思議、一句二句と読めるようになり、たまさかには滑らかに数頁がすすむことあり、ふだんの自分を忘れ我が賢さに陶然たることも。

国語教師何年やっても、凡愚代表のわたしなど、訓読の修練怠ればたちまち無間地獄へ逆落とし。ああ、寺子屋のお師匠様偉かった。

遠い昔…早朝の職員室にはT先生。「おいマキさん、酒臭いな。ちよつとこれ読んでごらん」。T市史の資料篇(中古・中世・近世)四巻を編集なさった碩学のT先生の「これ」とは、古筆のコピーで和歌が二三首。うーん。「明日までに読んでい」で。苦心惨憺、翌朝おぼえずと読み上げる。「ホッホッホ。それじゃ歌が台無しだ。それはだね」。

そして三年。学生時代の演習じゃ真面目に出ても週一だけ、T先生の演習は毎朝なれば力がついた自覚はある。しかし、ときには手も足も出ず、歌の一部分だけ読んで図書館の『国語大鑑』総索引使って調べだし、得々として読み上げること数回に及べば、「マキさん、あんた『大鑑』使ったな。ホッホッホ。そんなことでは」。

…あれから幾年、相も変わらず「そんなことでは」の自分がある。